<巻頭言>

―土木屋の思い―

高　居　富　一*

昭和20年の終戦直前，私は勧められるままに大学の「土木工学科」に学ぶことになった。当時の土木の学生は誰も「自然に挑戦する」とか「自然を征服する」とか勇ましいことを言っては「土木」に生き甲斐を感じていた。特にダムなどは憧れの的であった。生きのいい同級生の一人が，アメリカから取り寄せた文献を参考に，タイガー計算機を回しながら，汗水たらしてアーチダムの卒論を書いた。先端的な技術と大規模開発が彼の情熱を駆り立てたのである。一方私の方は洪水で切れた堤防の断面を調べ，その締まり具合からアーチアクションの存在をチェックすると言う地味な研究に取り組んだ。夏場は蚊と虻の攻撃をうけながらの作業であった。今の時代実験や計算よりも計画とか環境に人気があるのとは大違いである。その時代にはその時代の風が吹いていると云うことである。自然破壊とか環境保護の考え方は，恥ずかしながら誰の頭にも微塵もなかった。当時はトロッコとモッコに鶴嘴の時代，それに較べ自然は遙に大きく，その驚異は人力の遠く及ぶ所ではなかった。つまり自然と人間とは食うか食われるかの関係にあった訳で，土木屋は当然のこととしてこれに挑戦しなければならなかったのである。

「土木は国力と共にある」当時私はそう思った。自分の選んだ「土木」の道に誤りがないことを確認したかったからであった。そして結果は，私の予想を遙に越えた国力と，その国力の発展に応じた土木技術者の弛まざる努力が重なって，今日の素晴らしいインフラが築かれたのである。

戦後キティーだとかアイオンだとかの大型台風が相次ぎ，全国至るところの河川が大氾濫を起こした。かと思うと逆に冬は渇水に見舞われ，水主火従の時代のこと停電が頻発し工場の操業も儘ならない情勢となった。政府は多目的ダム法・電源開発促進法と云う具合に法整備を進め，この事態に対処することとなった。治水と利水，この二つのことを同時に解決する道は，大ダムの建設であった。そしてこの時の決定が本格的な大ダム時代の到来であり，建設機械化の幕開けであった。

日本には資源と言えるものは優秀な人材と豊富な水資源しかない。そしてアラブの国の油と違って日本の水資源は永久に尽きない。暴れる川を治め使える水にするのがダムであり，子孫に残す美田ならぬ美水の遺産である。一つの物を造ってダム程多くの効能を果た

* 株式会社　アイ・エヌ・エー社長

してくれるものが他に何があるだろうか？我々は日々先人が残してくれたこの遺産の恩恵に浴しているのである。

ここで思うことは，インフラ計画の「経済性」論議は近視眼的になり易いと云うことである。何故ならば，経済計算の物差しである金利も円レートもそして物価もみんな大きく変動するからである。造れば100年ももつダムのような施設の経済性議論に，変動する物差しをストレートに用いてもいいのだろうか。この２～３年の経過を見ても，公定歩合は四分の一になっているし，オイルショックの時は油の値段が15倍にもなった。昔，高名なダム屋さんが「ダムは大きければ大きい程良い」と言ったと云うが，これは経済計算だけに頼る風潮を揶揄したものだと思う。ダムタヾ論と云うのもあった。つまりダムは全部国産で出来るから外貨を使わなくても良いという意味で「タヾ」と言ったのである。外貨不足の頃の論議としてはご尤もである。今はダム無駄論を説くマスコミすらある。工水はもう要らないとは少し近視的過ぎないだろうか。何十年と掛かって先人が建設してくれた遺産を，湯水の如く使っていることを知ってか知らずか，極楽トンボの妄言である。福岡市民が去年から今年にかけて295日間も断水の憂き目に逢った。農民が米作りを止めて水を水道に回すという話が新聞に出た。水資源豊富な国としてまた先進国として，相互扶助は麗しいが断水は悲しむべき現実である。嘗て，ある電力会社の社長さんが「計算上の採算に係わらず，毎年一定量の水力は造る」と宣言された。長い経営の経験から出た言葉と受け取れる。先の五十嵐建設大臣が就任の抱負として「建設は国民の夢である」と言われた。社会党の大臣の発言だけに感銘を受けて聞いた。国家百年の大計は細かい議論よりも夢を描ける人に託されねばならない。

近年大型ダム建設に伴う負の部分が問題になり始めている。海外におけるダム計画は，その貯水量といい影響面積といい日本より一桁も二桁も大きいから議論も深刻である。

日本における大ダムの歴史は60年，環境アセスメントが始まってから30年である。大ダムの建設が自然生態系・水循環系・地文人文系等に与える影響評価は，年を追って厳しさが増して来た。現に幾つかの問題点が顕在化しており，計画・設計・施工上の解決策が改めて問われている。真剣に取り組み，子孫に負の遺産を残してはならない。

昭和40年代半ば「成長の限界」と言う新語が現れた。汚染をたれ流し続けると，ある日突然自然生態系が浄化能力の限界に達し，それ以上の成長は望めなくなると云うものである。人間の営みは自然の許容範囲内に止めなければならないと云う極く当たり前のことに気が付いた訳である。建設の場合は若干現象は違うが広い意味では同じである。

そこにある材料で，そこの地形・地質に合わせてダムを造ると云う発想を聞いたが，何となく地球に優しいダムと云う感じがしてくる。日本人は「三代遡れば百姓」だと言われる位土着である。技術者が地域に根を下ろし一貫して事にあたるならば，そのダムが土着の風景として地域に溶け込むことと思う。

シビックデザインや景観設計とか多自然形河川という風に新しい思想が土木屋の思考の壁を突き破りつつあることは，21世紀を迎える今日誠に頼もしい限りである。